

# 生保会社に対する「基礎利益」指標の導入

保険研究部門 荻原 邦男

## 1. 「基礎利益」の導入

### (1) 「基礎利益」とは

2000年度決算から生保会社のフロー収益を表す統一指標として「基礎利益」が導入された。

これは、経常利益から売却損益などの臨時的損益を除いたもので、「生命保険会社のフローの基礎的な収益の状況を示す指標」と位置づけられている。ニッセイ基礎研究所は2年前から「業務純益」指標の導入を提言してきたが、ほぼ同様の利益指標が導入されたもので、ディスクロージャー面での進展と評価される。

### (2) 「基礎利益」の動向

2000年度の「基礎利益」は大手中堅10社計で20,900億円、対前年 4.8%となった。「業務純益」（ただし、配当を控除）ベースで見ても、98年度（23%）99年度（13%）と低下してきていたが、今年度も引き続き減少となった。

超低金利の継続が予想されるなか（利差損要因の継続）、保有契約高の減少はペースダウンしたものの継続しており（費差益、死差益の縮小要因）、今後も「基礎利益」の減少が予想される。厳しい状況が続くと見なければならない。

### (3) 導入を巡る経緯

「基礎利益」が導入された経緯を振り返って

みよう。従来はストック指標に偏重していた保険会社の健全性指標を、総合的に判断することを目的に、新たにフロー面の健全性を表すために導入された指標が基礎利益である。

昨年度、生保の破綻が相次いだ中で、契約者に保証した「予定利率」を運用利率が下回る、いわゆる「逆ざや」が問題視され、14社計で1兆5,000億円といった数字が強調して報道されるなど、あたかも生保の最終的な利益がマイナスであるかのような印象を与えた。さらに、「逆ざやは累積する」との一部報道も見られるに至った。基礎利益の導入により、「逆ざや」はあっても、それを上回る益があり、合計ではプラスになっていることを結果的に示すこととなった。

### (4) 「基礎利益」はどのように受け止められたか

「基礎利益」は「利差益+死差益+費差益」にほぼ等しく、「逆ざやを埋めるに足る利益があがっている」ことは理解を得てきているものと思われる。ところが、こうした意図とは別に、マスコミの一部からは以下の指摘がされている。

高い死亡率設定により死差益が多額に発生しており、問題である（儲け過ぎ論）。

基礎利益の開示により、トータルで利益が出

ている保険会社が多い。そうであるなら既契約の予定利率引き下げは不要ではないか。

## 2. 生保の利益をどう見るか

そこで、あらためて基礎利益の位置づけ、生保の利益の特色についてコメントしたい。

(1) 生保の利益の中には「新旧の保険料格差によって必然的に発生する部分」が含まれる。

保険料の計算に用いる死亡率などの前提は、将来の予期せぬ変動を考慮して、やや保守的に設定されるのが原則である（結果として予定利率部分はこの原則の例外となった）。そして、実績と予定との差異によって生ずる利益を、事後的に配当で調整する方式が採られている。

死亡要素についてみると、予定死亡率は継続的に引き下げられてきているため、最近の死亡実績に基づく予定死亡率を適用した保険料に比べ、それ以前の契約者は相対的に高い保険料となっている。したがって、この部分から必然的に利益が発生することになる。

このように、生保の利益は、事業活動の成果という要素のほか、保険料計算に用いた前提の差から発生する、（事後的に配当が必要であるという意味で）いわば見かけ上の利益も多く含まれている。こうした、生命保険事業の利益の持つ一般企業の利益とやや性格を異にする部分については、今後とも十分な説明を行い、理解を得ていく努力が求められるだろう。

(2) 「基礎利益」の全額が配当や内部留保に使用できるわけではない。

右図は生保の利益の構造とその用途をイメージ的に表したものである。

基礎利益のほか、有価証券の売却損益などを中心としたキャピタル損益が利益となるが、このうちの一部は、不良債権の償却、不動産

関係の含み損の償却、さらには今年度から開示が開始された退職給付債務の償却に充てていく必要がある。

こうした事情は銀行でも同様である。銀行業においては、すでに1989年から「業務純益」指標が一般に開示されている。旧大手16行ベースで見た2000年度の「業務純益」（一般貸倒引当金繰入前）は3兆4,000億円であるが、これを上回る4兆3,000億円のクレジットコスト（不良債権処理額＋一般貸倒引当金繰入額）が発生しており、「事業会社なら実質赤字を意味する」（2001.5.28「日経公社債情報」）

したがって、銀行の「業務純益」だけを見て「儲け過ぎ」である、との指摘はされていない。同様に、費差益と死差益の水準だけに言及するのは、必ずしも適切な議論とは言えないのではなからうか。

## 3. 「基礎利益」は生保を見る指標のひとつ

今般の「基礎利益」の導入は、ディスクロージャー面での前進である。しかしオールマイティの指標ではなく、生保のパフォーマンスを測定する指標の一つである。「基礎利益」を含め、総合的な観点から、生保の利益構造に注目していきたい。

図表 - 1 生保会社の利益構造モデル

